

# 心の目

連載エッセイ ②45

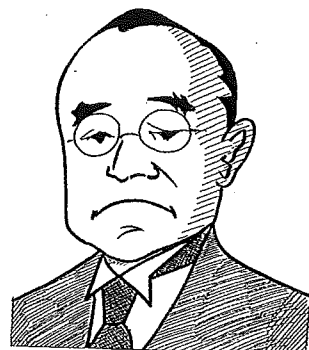
札幌かに本家社長 日置 達郎

## 『愛知用水の歴史 ③』

久野庄太郎氏と濱島辰雄氏の一身を賭けての献身的な活動が、すべての歯車を大きく揺り動かすこととなったことは前回記述した通りです。地道な説明会を通し地域での理解と協力を取り付けつつ、いよいよ国へもその働きかけを強めていきます。

昭和23年12月には、当時の総理大臣であった「吉田茂」首相に陳情に出向きます。当初五分間の面会予定のところを双方話が弾んで四十分に延長してしまった、というエピソードが残っています。陳情に訪れた二人も、かなりの手応えを感じつつ席をあとにしたことと思います。ちなみに「吉田茂」氏は内閣総理大臣に計五回任命されています。日本の政治史上彼

より他にそのような人物はおらず、在任期間は二六一六日、ゆうに七年以上もの間その椅子に花を咲かせ続けたことになりました。



戦後の日本の礎を築き  
歴史に名を残した政治家

吉田 茂

いずれにしても、辣腕や知略を發揮して戦後の混乱した日本を盛り立てその礎を築いたのはまさしく彼の力であり、戦後日本人の記憶に残る総理大臣の一人と称えたいと思います。そして、愛知用水建設を将来の国家的プロジェクトと賞賛

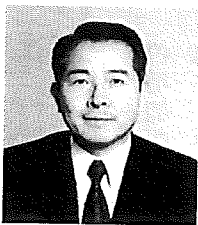
し、その後押しに少なからぬ影響を与えて下さったものと思います。

その他にも久野氏や濱島氏の思いに打たれ、多くの人たちが支えとなり協力を申し出てくれました。昭和24年9月に結成された「愛知用水期生同盟会」の初代会長「森信蔵」氏（半田市長）もその一人です。愛知用水を作るためには、当然莫大な費用が必要となります。今でこそ、日本は世界の国々に多大な援助を施す側となっておりますが、当時は全く逆の立場、戦後混乱期のさなか、国内にその資金を求めようという状況ではありませんでした。

昭和25年5月、渡米の機会を得たこの森氏は、期生会で用意された「愛知用水の主旨と理想」という論文の翻訳したものを持参、援助要請のため当時の世界銀行の副総裁や首脳部にこれを手渡しその必要性を説明、融資の扉を開いたとのことです。二年後の昭和27年11月から世界

銀行との融資折衝がスタート、複数回の現地視察・調査を得て、昭和32年8月、政府保証契約による調印にこぎつけます。七〇〇万米ドルの貸出と技術供与が約束されたわけですが、当時の為替レートは一ドル三六〇円で換算すると二五億円という額となります。当初の建設予算の概算は五五億円、最終的には四二三億円にまで膨れあがったわけですが、いずれにしても国として後戻りのできないプロジェクトであったということが言えます。

(次号に続く)



著者プロフィール

昭和10年、三重県津市美杉町出身  
札幌かに本家チエーン代表取締役  
店舗設計や庭造りが趣味。  
日本飲食産業協会副会長  
名古屋まつり・英傑行列

第十代徳川家康役

平成28年6月1日発行  
月刊「存心」  
6月号 掲載